

ソロモン諸島ロヴィアナの季節周期とそれを巡る語彙 についての考察

A Study on the Seasonal Cycle and Related Vocabularies in Roviana, Solomon Islands

古澤 拓郎

Takuro Furusawa

京都大学

Kyoto University

Abstract: This paper examines the indigenous calendar system of the Roviana-speaking population in Solomon Islands by attempting to reconstruct the former indigenous calendar system, which was recorded in vocabulary (Waterhouse 1928) and has seldom been passed down to the present generation, by clarifying the people's recognition of seasonal cycles. What became clear from fieldwork and literature surveys is that the present Roviana people, who already depend on the Gregorian calendar, recognize natural cycles through tides, wind direction, and the ecology of organisms, and loosely use celestial bodies to measure time in their nocturnal livelihood activities. The names of the months recorded in the early 20th century included those with unclear meanings and times, but more than half were related to the ecology and rituals related to *Canarium* spp. or *Cardisoma* spp. However, it was not possible to clarify how the New Year's ritual *hai* and the first month *tabuna* were determined in the former indigenous calendar system. When objective information about natural phenomena and the recorded indigenous calendar system are compared, it suggests that they have inherited the substrate culture of the Austronesian language family from Melanesia to Indonesia and may have also been part of proto-Polynesia.

Key words: traditional calendar, *Canarium*, *Cardisoma*, tidal season, monsoon

1. はじめに

世界各地にはその風土で生まれ、受け継がれてきた暦がある。このような伝統的な暦を理解することは、その地の自然と季節に合わせた生業という人類の生態を解明するだけでなく（秋道 1995）、自然観と宇宙観や信仰と儀礼という文化（Burman 1981）、天体や自然を観測する技術（Yoshida 1980）、文化伝播（Kirch & Green 2001；Goto 2022）など人類の適応とその多様性の解明にも資することである。その一方、西洋で完成したユビキタスな太陽暦であるグレ

ゴリオ暦が世界を席卷するようになって既に長く、多くの地域社会の暦は十分に解明されないまま消滅した、あるいはしつつある。

メラネシアの各地に独自の暦があったに違いないが、研究がされたのはごく一部であり、記録されないまま消滅してしまったものも多い。筆者が地域の生態環境から人々の生業活動にいたるまで研究してきたロヴィアナ (Roviana) 集団も同様である。しかし、ロヴィアナについては、ヨーロッパ人が 20 世紀初頭にロヴィアナ語の月名とその季節についての断片的な記録を残しているという特徴がある (Waterhouse 1929)。

本研究の目的は、現代の生活では使われなくなったロヴィアナの暦法を調査し分析することで、これ以上の知識喪失が進む前に、可能な限りの記録を残すことである。また、この目的のために、生態環境や天体という自然現象についての客観的な情報から、かつての暦を再構築するという方法論的試みを行う。これを通じて、アジアから発し、メラネシアからミクロネシアとポリネシアへと拡散した人類であるオーストロネシア語族の一つとしての、ロヴィアナの暦の特徴を明らかにする。

2. ソロモン諸島ロヴィアナ

ソロモン諸島は地理的にメラネシアに位置し、1978年に独立した国で、6つの主要な島と、900を超える小島で構成され、9州と首都特別市があり、人口は約70万である。ここには話者消滅言語も含めて73ほどの異なる言語があり、そのうちオーストロネシア語族66言語とパプア諸語(東パプアン諸語)4言語、在来の手話言語1、その他に公用語である英語、共通語ピジン英語がある (Eberhard et al. 2024)¹。20世紀初頭からキリスト教化が進み、いまでは国民の90%以上がそうである。

本論文の対象はウェスタン州のロヴィアナ集団である。同州は主要島ニュージョージア島のほか州都ギゾのあるギゾ島、ヴェララヴェラ島、レンドヴァ島、シンボ島などで構成され、ロヴィアナ集団はニュージョージア島西南部にあるロヴィアナラグーン全域とその西隣にあるヴォナヴォナラグーンに住んでいる(図1)。ロヴィアナラグーンの西端にあるムンダ周辺は、伝承におけるロヴィアナ集団発祥の地であり、ヨーロッパ人が到達して以降の交易や宣教の拠点、第二次世界大戦における日本軍による飛行場建設を経て、いまでは国際便も着く飛行場のある町になっている。ムンダの位置は南緯8度19.2分東経157度17.4分であり、おおむねここを中心として東西80キロメートル南北10キロメートルの範囲がロヴィアナである。

ロヴィアナは熱帯雨林気候であり、年間を通して気温や降水量の変化が大きい(図2)。また人口のほぼすべては沿岸部に集中しており、いわゆる海洋性熱帯雨林気候の中に暮らしている。ソロモン諸島の中には雨季と乾季のある熱帯モンスーン気候に近い気候もあるが、ロヴィ



図1. ソロモン諸島ロヴィアナ周辺図. United Nations Office for Coordination of Humanitarian Affairs (2018) を元に筆者作成.

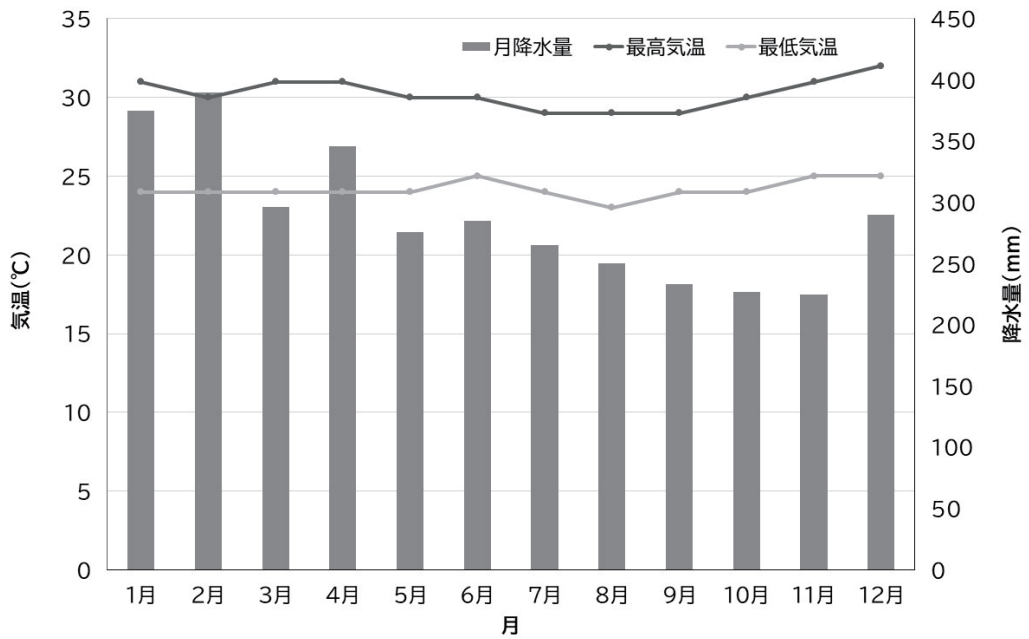


図2. ソロモン諸島ウエスタン州ムンダにおける月別平均降水量、平均最高気温、平均最低気温. 気象庁 (2018) から筆者作成.

アナは雨季・乾季の差がない。また同国において1～4月頃は熱帯低気圧の季節とされるが、西部に位置するロヴィアナでは深刻な被害がでることは稀である。

ロヴィアナの主要生業は移動耕作による根茎類の農耕と、ラグーンから外洋にかけての多様な海域における漁撈、マングローブにおける貝類や甲殻類の採集などであるが、グローバル化の影響と無縁ではない。ムンダは、町として発展しており、賃金雇用の定職がある世帯が30%ほどあり、さらに非正規な賃労働の機会が多くある（古澤 2021）。それ以外の農村部でも、20世紀末にはじまったアジア系企業による森林伐採事業がロイヤルティ（伐採契約料）や雇用として現金をもたらしたことから、市場経済も浸透してきている（古澤 2021）。ロヴィアナの伝統的農作物はタロイモ類（Araceae）とヤムイモ類（*Dioscorea* spp.）であるが、19世紀～20世紀初頭までに持ち込まれたサツマイモ（*Ipomoea batatas*）（Hviding & Bayliss-Smith 2000；Somerville 1897）、20世紀半ばのキャッサバ（*Manihot esculenta*）が、栽培のしやすさと生産性の高さによって、今では主要作物となっている。

ロヴィアナ語はマレー・ポリネシア語派オセアニア諸語の北西ソロモン諸語に分類され、ニュージョージア島北西部のクサゲ語、北部のホアヴァ語、東部のマロヴォ語、さらに西にあるシンボ島のシンボ語などとも同じ分類（New Georgia linkage）に属する。ただし、南のレンドヴァ島や西北のヴェララヴェラ島にはパプア諸語がある。ロヴィアナ語のネイティブ話者は約1万人である（Gordon 2005）。ニュージョージア島には、島の内陸にいた集団と、海岸部にいた集団があり両者の間で交易が成立していたほか（Hviding & Bayliss-Smith 2000；石森 2001）、ロヴィアナ集団は現在のチョイスル州やイザベル州にある遠方の島まで遠征して攻撃し、首狩り風習や奴隷の獲得をしたとされ、西部ソロモン諸島において広範囲に影響しており、有史以前から多言語との血縁的・文化的・経済的な接触があったとされる（Aswani & Sheppard 2003；Goldie 1909；Hviding & Bayliss-Smith 2000）。

19世紀初頭までにはヨーロッパ船がロヴィアナを訪れるようになり（Hviding & Bayliss-Smith 2000）、同世紀半ばころにはヨーロッパ人がロヴィアナ近辺に居住し、ロヴィアナ人と交易をしていたが、1891年に英国軍艦ロイヤリストがムンダ沖にあって当時の中心地ヌサロヴィアナ島を攻撃したことを経て（Somerville 1897）、1893年にイギリスがソロモン諸島を保護領化した。1902年に、この地域に訪れた最初のキリスト教宣教師ジョン・フランシス・ゴールドイー（John Francis Goldie）がムンダを拠点に周辺に布教したため、ロヴィアナ語は西部ソロモン諸島の共通語（lingua franca）ともなった（Waterhouse 1928）。逆に、ロヴィアナ語内でも、地域によって語彙や発音に違いがある場合があり、それはヌサロヴィアナ島から各地への移住した歴史と各地の生態環境による（Furusawa 2009）。また、人類学者のA.ホカートは1908～09年にシンボ島を調査したときに、ピジン英語を用いたと記録しているように（Hocart 1922）、ピジン英語も古くから広まっていたが、現在でも農村部にはロヴィアナ語しか話せない人もいる。

ソロモン諸島各地の集団を対象にした人類遺伝学的研究において、同国の民族には大半を占めるメラネシア系オーストロネシア語族集団の他、ポリネシア系同語族集団と、東パプア諸語集団がみられるが、それぞれの間には遺伝的混淆があり、ムンダ集団は遺伝学的にメラネシア系オーストロネシア語族集団の中心的な形質であるという研究がある (Isshiki et al. 2020)。

ロヴィアナに限らずソロモン諸島全域について、伝統文化や在来知識といったものを指す在来語彙はなく、慣習を意味するビジン英語の *kastom* およびそのロヴィアナ語読みである *kasitomu* という語彙がそれらを指す (石森 2001)。ロヴィアナは首狩り風習の中心地であったことから、在来信仰や慣習については、19世紀末から記録がある (Goldie 1901; Somerville 1897; Sheppard et al. 2000; Aswani & Sheppard 2003; Nagaoka 2011)。

ロヴィアナの社会において、チーフ (首長) は *bajara* という。既婚男性や何らかのリーダーを *palabatu* というが、チーフは伝統的には血縁によって継承され、政治的な頂点にある。また、広域を治め、複数のチーフを統括する大チーフは *ηati bajara* という。ただし、20世紀後半以降、チーフの影響力は低下しており、キリスト教の司祭・牧師が村のリーダーになる場合や、血縁に寄らず有力者をチーフとする場合もある (古澤 2021 など)。

祖先霊 (祖先神)、森林や海の自然霊 (自然神) など、数多ある精霊への畏怖は、キリスト教化以降であってもロヴィアナ社会の理解に欠かせない。この精霊は初期の英語記録では *spirit(s)* とされていたが、ロヴィアナ語では「精霊」 *maqomaqo* ばかりでなく、「霊」 *tomate* (英語では *ghost* として記録) も含む。筆者の経験において祖先神や良い精霊も、災いをもたらす悪い精霊もどちらも、*tomate* と呼ぶことがある一方、キリスト教聖書における精霊は必ず *maqomaqo* という²。また、ロヴィアナ語の *hope* は、ビジン英語における *tambu ples* すなわち、タブーな場所を指すばかりでなく、場所・物・人間関係など文化のおよび信仰的規範による禁忌や禁止を表す単語である。単に *hope* という場合は、祖先あるいは首狩り風習における戦利品としての頭骨を保管しているような (図3)、「聖地 (忌地)」を想起させる。また、*hope* には森林の中や水上に所在する場合もあるが、そのようなものの有無にかかわらず、森林や海洋への畏怖はしばしばみられ、例えば狩猟や採集のために森林に入るときや、漁撈や移動のために海に出るときは、人々はその前に祈りをささげる。

以上、ロヴィアナ社会に関する基本的な情報をまとめたが、このような生態環境条件にある限り、ロヴィアナの人々は暦によって季節変化を予測することは生存上必須というほどではない。19世紀末のニュージョージア島でも、朔望周期以上の時間は数えられておらず、それは作物に季節がなく頻繁に収穫できることや、気温も年中同じであり、さらに熱帯低気圧 (*hurricane* と記載) もこの地域には稀であり、時期を決めるのに適するものがないからであろうとした記録がある (Somerville 1897: 404)。グレゴリオ暦が浸透したため、現在の生活において彼らが在来の暦法に頼ることはない。



図3. 頭骨などが祀られているロヴィアナの聖地 *hope* の一つ (2023年9月筆者撮影)

3. 分析の枠組み

本研究の主眼は、すでに消滅したといえるロヴィアナの在来暦法を、残された文字記録と、現在のロヴィアナの生態環境、生活と生業の分析を通して、理解することである。そこで、筆者はロヴィアナにおける時間認識および自然や天体周期とその利用に関する現地調査と、文献を通じた月名語彙の解釈を行った。

オーストロネシア語族の在来暦法の研究において、大きな焦点の一つはインターカレーション (intercalation) (置閏法³ともいう) の技術と知識にある。自然に依存した生業社会は、季節変化の主要因である太陽周期を暦に取り入れる例が多い。ここでインターカレーションは、現代のカレンダーがない状態で、毎年太陽周期を把握して新年を始める方法をいう。Yoshida (1980) はオーストロネシア語族の暦法は、星暦 (sidereal calendar)、自然暦 (natural phenomena calendar)、太陰暦 (lunar calendar)、太陽暦 (solar calendar) のうち2つ以上を組み合わせてできていて、しばしばそのうちの1つが主なインターカレーションとなり、他が副次的な役割を果たしているとした。インターカレーションは地域・集団ごとの違いが顕著にみられるが、語族を通して共通点がみられることもある (Leach 1950; Yoshida 1980; Goto 2022)。

日常的には、観測が容易な月の満ち欠け、すなわち朔望周期 (太陰周期) を用いている社会

が世界的に多い。朔望周期は平均して約 29.5 日であるため、これを単位にして 12 回繰り返しても約 354 日にしかならず、太陽周期の約 365.2422 日からずれてしまう。そのため、朔望周期と太陽周期を両立されるためには、やはりインターカレーションが必要となる。東アジアの旧暦やインドネシアのバリ暦のように、平年は朔望周期を 12 回数えるが、メトン周期（19 年 7 閏法）によって数年おきに 13 回繰り返す閏年を設ける例は、太陽や星の観測において高度な技術に基づいている（五十嵐 2008）。他方、オーストロネシア語族の多くの社会ではより素朴な方法として、朔望周期を数える数を 10 回程度以下にしておいて、それ以外の期間は天体・自然の特定現象のみを観測して新年をはじめめる例や、年内に起こる複数の現象を観測しておいてその都度、太陽周期に合わせる例がみられる（Leach 1950；Yoshida 1980；Goto 2022；五十嵐 2018；古澤 2017）。太陰太陽暦とは、狭義には前者のメトン周期によるものをさすが、本論文では後者の例も含むこととする。

主な調査地は、ムンダ町と、ロヴィアナラグーン東部にあるサイキレ慣習地のオリヴェ村である。筆者は通算約 3 年ロヴィアナに滞在しており、村人の生活に参加し、生業と自然利用、環境と健康に関わる人類生態学的研究を行ってきた。筆者は、ロヴィアナ語で聞き取りをしたが、ほとんどの場合、旧知の村人を同伴し、わからない単語についてはインフォーマントないし同伴者にロヴィアナ語で意味を説明してもらった。本研究は筆者の長い滞在経験により、常識化してしまった情報も用いつつ、近年本研究目的のために聞き取りした情報については、インフォーマントを識別するアルファベット、年齢代と性別、聞き取りした場所、聞き取りの年月日を付す。

また、検討する史資料として 20 世紀前半に出版された『A Roviana and English Dictionary』を用いる。この資料は、1928 年にジョン・H・L・ウォーターハウス（John H. L. Waterhouse）が出版した版（以下、Waterhouse 1928）に加えて、1949 年に L. M. ジョーンズ（L. M. Jones）が改訂増補した版（以下、Waterhouse 1949）がある。既述のようなイギリスによる保護領化、宣教師による布教活動開始の時系列の中で、比較的早期に記録された資料であり、ヨーロッパ人接触初期の習慣も多く記録されていることが特徴である。何より、今に至るまで、もっとも多くの月名語彙を収録した文献資料である。両版の間に大きな変更は見られないため、本論文では原則として改訂版とされる後者を用いる。

ロヴィアナはソロモン諸島保護領化のきっかけとなり、布教の最初となったが、ヨーロッパ人との接触がより早く密であり、暦も含む慣習についての研究が多いのは、近隣のシンボ島である。そこで、本研究の考察に当たっては、シンボ島に関する主要な文献（Hocart 1922、Burman 1982）にも注目する。

本論文におけるロヴィアナ語表記は、ロヴィアナ地域で最も普及したものをを用いる。母音も子音も基本的にはローマ字読みと同様であるが、例外として *b* と *d* は有声破裂音であり、別の

表記法によっては mb と nd とされる⁴。ガ行の子音は3種類あり、g は摩擦音（別表記法では gh）、ŋ は鼻濁音（同 n）、q は有声破裂音（同 ngg）である。またバ行では、b のほかに摩擦音の v がある。

4. 結果

4.1. 時を表す基本語彙

最初にロヴィアナの基本的な時間測定概念を説明する。「日」を指すロヴィアナ語は *rane* であり、「1日」*keke rane*、「2日」*karua rane* と数え、「1日目」のことは *rane kekenu*、「2日目」は *rane vina rua* というが、*rane* という単語単体であれば日出から日没までの「日中」をさす。一方、「夜間・晩」を指すのは *boji* であり、「1晩」*keke boji*、「2晩」*karua boji* と数える。ロヴィアナ語の会話において時間経過を表すのは、日数による場合だけでなく、「(出来事から)すでに2晩経った」というように晩数による場合もある。晩数を数えることは Somerville (1897) のニュージョージア島（主にマロヴォ語と思われる）の記録や、Hocart (1922) によるシンボ島葬送儀礼の記録とも一致する。

「時」を指す単語は *totoso* であり⁵、「いつ」「何時」を聞く疑問文は *totoso sa?* で成立する。日内のある時点を指すのは英語の clock に由来する *koloko* という単語が用いられ、例えば「1時」*keke koloko* である。「今・現在」の時点は *kamahire* と言い、「今日」を指す語彙は現在より前か後かで分かれ、前者であれば *ŋinoroi*、後者であれば *kohite* である。「明日」は *vugo*、「明後日」は *reperere* であり、両単語を組み合わせた *vugo reperere* は「未来」を意味する。「昨日」は *norae*、「一昨日」は *reporoi* であり、「昔」のことは *pukerane* という。日を問うとき、上述の *totoso* を使うのはややカジュアルな聞き方であり、丁寧な表現では未来については *pana visa*、過去については *visoroi* という。

人々の挨拶言葉からすれば、日が出てから「午前中」*munumunu*、「正午ころから午後早めの時間」（直訳すると「日中の真ん中」）*koraparane*、「夕方」*veluvelu*、「夜間」*boji* の語彙がある。これらの語彙は英語の good morning が *munumunu leana*、good afternoon が *koraparane leana*、good evening が *veluvelu leana*、good night が *boji leana* に一対一対応していることから、布教以降の西洋式教育に由来すると推察される。

一方、参与観察と聞き取りを通じては、これらだけでない語彙があった（表1）。「太陽」*rimata* が「昇る」*gasa* 時とき、つまり日の出 *gasa rimata* と、「沈む」*lodu* 時、つまり日の入り *lodu rimata* があり、この二時点の間に上述の朝、午後（早め）、夕方の3つの分類が位置づけられた。さらに「夜明け前～夜明け方」*vaqavaqasa* も含め、太陽の高さ（ないし大気の明るさ）に応じた分類は計6つと細かい。一方、太陽が沈んで以降の時間帯は、「夜間」*boji* と、「深夜」

表 1. ロヴィアナ語における日内の時間分類

ロヴィアナ語彙	意味
<i>Vaqavaqasa</i>	夜明け前～明け方
<i>Gasa rimata</i>	日の出
<i>Munumunu</i>	午前中
<i>Koraparane</i>	日中
<i>Veluvelu</i>	夕方
<i>Lodu rimata</i>	日の入り
<i>Boŋi</i>	夜
<i>Korapa boŋi</i>	深夜

(直訳すると、「夜の真ん中」) *korapa boŋi* しかない。

次に大きい時間単位として、「週」は英語の week 由来の *viki* という単語が用いられる。月については次節で詳しく述べる。「年」は *vuaheni* であり、例えば「(西暦) 2024 年」を *vuaheni 2024 (karua tina hiokona made)* と言い、「(年齢) 24 歳 (3 人称単数)」を *24 (hiokona made) vuahenina* と言う⁶。

4.2. 月の周期

ロヴィアナでは、朔望周期が時間経過の認識に用いられている。天体としての「月」も、暦としての「月」も、いずれも *sidara* という⁷。

Aswani and Vaccaro (2007) が収集した朔望の語彙は包括的である。「朔(新月)」はロヴィアナ語で *koroqana* であるが、ロヴィアナ文化においては朔の翌晩に初めて月が目視できたものが「新月」*sidara vaqura* と呼ばれる。なお Waterhouse (1949) によれば、かつて人々はハミングしながら指で唇を叩き特異な音を立てることによって、この「新月」の晩を歓迎したという。

Aswani and Vaccaro (2007) に戻ると、「新月」は別名 *tada sidara* といい、*tada* は月齢を数えるときに用いられる語彙である。続いて「月が見え始めて 2 日目」*tada keke* (*keke* は 1 の意味)、「同 3 日目」*tada karua* (*karua* は 2 の意味) である。この数え方で進み、「同 8 日目」*tada zuapa* (*zuapa* は 7 の意) が上弦の半月にあたる。これまでの 8 晩をまとめた期間を *tada sidara* ということもある。

ここからは *noma sidara* (直訳「大きい、月」) と呼ばれる期間にはいる。満月前の数晩は *gaba* と呼ばれ、「満月 3 晩前」*gaba keke*、「同 2 晩前」*gaba uhi*、「同 1 晩前」*gaba peka* (もしくは *gaba*) を経て、「満月」*hobe rimata* (直訳「代わる、太陽」) となる (Aswani & Vaccaro

2007)。

満月の翌晩は *puta koburu* (直訳「寝る、子供」) であり、その翌晩は「満月 2 晩後」*pae keke* (*pae* は「隠れる」の意)、「同 3 晩後」*pae karua*、とすすみ「同 7 晩後」*pae onomo* (*onomo* は「6」の意) まで数える。そして下弦の半月である「同 8 晩後」*zuapa tada pule* (*pule* は「再び」の意) は、上弦の半月の語彙と対応している。そこから新月までの間は、*hiteke sidara* (直訳「小さい、月」) の期間と呼ばれる (Aswani & Vaccaro 2007)。

なお筆者の参与観察の限りでは、これらの朔望周期の語彙は一部の老人や頻繁に漁撈を行う人にはある程度知られているが、誰もが全てを知っているというものではない。また、地域や個人により若干の知識の違いがみられる。

Waterhouse (1949: 112) は *sidara* の説明において、ロヴィアナの暦 (calendar) は半分に分けたココヤシの実の殻 13 個によってできていると記載している。これらのヤシ殻に穴をあけ、棒に突き刺しておき、毎月が過ぎるごとに人は 1 個ずつ別の棒に移していったという。そして、もう一方に 13 個集まると次からは元の棒に 1 個ずつ戻したという。ヤシ殻ではなく貝を用いる場合もあったようである (Waterhouse 1949: 112)。

類似の記録は、シンボ島にあり、そこでは半分に割られたヤシ殻は 6 個であり新月が来るごとに、1 個ずつ日の昇る方 (東) に移していき、6 個すべてが移ると枯渇 (scarcity) の時期になり、そこから再び新月ごとに 1 個ずつ、日が沈む方 (西) に戻していくと豊富 (plenty) の時期になるという (Burman 1981: 258)。

筆者の聞き取りにおいて、かつてインフォーマントの幼少期にはココヤシの殻の繊維 (*kokoe njohara*) を、トウ (*aroso*, *Calamus* spp.) を割いたロープに、在来の新年初月に (後述) たくさん縛り付け、それを毎月一つずつ抜きながら月を数えていき、無くなったら次の新年が来たという話があった (B, 70 代男性、オリヴェ 2014/11/4-5 聞き取り; R, 60 代男性、オリヴェ、2014/11/5)。

後述するように、ロヴィアナも太陽周期を認識していたと考えられるため、平年はヤシ殻を 12 回移動、閏年は 13 回移動させていたとすれば、太陰太陽暦として合理的である。しかし、いまでは詳細が不明であるうえ、宣教師がカレンダーの概念を教えるために使った可能性なども考えられるため断定はできない⁸。

ここで、現在のロヴィアナ語で「季節」や「旬」を表すのは、前節で挙げた *totoso* と今節の *sidara* である。例えば後述するカナリウム (*Canarium* spp.) が実る季節を *sidara okete*、あるいは *totoso te okete* と表現できる。このことからすれば、ロヴィアナの人がいう *sidara* は、厳密な朔望周期ではなく、より緩やかな季節の様子を意味する場合もある。同様に、年を表す *vuaheni* が、「年頃」とか「当たり年」を意味する場合もある。

4.3. 潮汐の季節

月を超える時間認識として、潮汐変化による季節があり、「日中深い・夜間浅い」を意味する *odu rane-masa boji*、「日中浅い・夜間深い」を意味する *masa rane-odu boji*、「留まる海水」を意味する *vekoa kolo*⁹ の3つの季節区分である (Aswani 1998)。「日中深い・夜間浅い」は9月末～1月半ば、「海水が留まる」は2月初～4月半ば、「日中浅い・夜間深い」は5月～9月である (Aswani & Vaccaro 2008)。この3つの季節は、潮汐の傾向が違うことだけでなく、それぞれで漁種・漁法や、漁場が変わることで認識されている。

この潮汐による季節認識が、何を反映しているのかについて考察をしておく。いうまでもなく、潮汐は主に月の引力によって起こり、月の引力および地球の慣性力により、潮位が上がりきる満潮が1日2回、下がりきる干潮が同2回ある。また朔（新月）と望（満月）のころは地球と月と太陽がおよそ一直線上になるため太陽の引力が加わる大潮となり干満差が最大となり、半月のころは太陽と月の引力が分散されて干満差最小になる。ここで月が地球を公転する周期は、地球の自転周期よりもやや早いため、毎日満潮・干潮時刻が約50分ずれていく。つまり、上記の潮汐3季節は、ある季節は日中が満潮で夜間干潮（あるいはその逆）であり続けることを指すわけではない。

実際、筆者の観察と聞き取りによれば、これらの単語は季節とは関係なく、潮の状況を表現するためにも用いられる。つまり、昼頃に満潮を迎える日を「日中深い (*odu rane*)」、昼頃に干潮を迎える日を「日中浅い (*masa rane*)」といい、小潮から長潮の潮汐最小のころを「海水、留まる (*vekoa kolo*)」と表現する場合があるのである。

しかし、潮汐変化は月の引力と遠心力だけでなく、他の力学や海底地形にも左右されるのであり、潮汐の季節性はある。アメリカ海洋大気庁（通称 NOAA）は、潮汐調和成分として地球、太陽、月の相対的な位置関係など37項目を用いている。潮汐表は現地での記録によってしか再現されず、ロヴィアナはおろかソロモン諸島について、実際の潮汐データは利用できないが、南太平洋で利用できる数少ない NOAA 予測の潮汐データ (NOAA 2024) にフィジーのスヴァ（南緯18度8.0分、東経178度25.5分）におけるものがある。そこで2023年1月と7月について、スヴァにおける満潮時と干潮時水位を、それを迎えたのが日中（6～18時）か夜間（18時～翌6時）かに分けて集計した。すると1月は日中の満潮時水位が夜間の満潮時水位よりも高い日が31日中20日あり、すべての日について干潮時水位は日中よりも夜間が低く、つまり「日中深い・夜間浅い」になった。一方、7月は夜間の満潮時水位が日中の満潮時水位よりも高い日が31日中18日あり、夜間の干潮時水位が日中の干潮時水位よりも高い日は28日であり、おおむね「日中浅い・夜間深い」になった。このように、特に夜間の干潮時水位を見ていると潮汐の季節変化が分かりうる。

これは海流や、地軸の傾きによる太陽引力の季節性によると考えられ、同じ南半球であるソ

ロモン諸島でも、太陽面を向く季節は日中水位が高くなる可能性が高い。そのためロヴィアナの潮汐による季節認識は、太陽周期（地球の公転）を反映したものであると考えられる。

4.4. 風の季節

「風」 *givusu* に関する季節もある。Aswani & Vaccaro (2008) と筆者の聞き取りは概ね同じであり、風名 *gevasa* は南東から吹く風であり4月半ばから5月に始まり10月頃までとされるが、実際には年間を通してロヴィアナでもっとも頻繁に吹く風である。ロヴィアナが南半球の南回帰線以北にあることから、これは恒常風としての貿易風を指す。

一方、メラネシアに特徴的な季節風である北西モンスーンを指すのが、風名 *peza* である。Aswani & Vaccaro (2008) によればこの風は10月に始まり4月まで、筆者のインフォーマントの一人によれば特に1月～3月（R、60代男性、オリヴェ、2014/11/3聞き取り）に集中する。この風は、熱帯低気圧になるなど、危険な風であると認識されている（図4）。同インフォーマントによれば、この時期が近づくと、野外とくに森林に近づくのが危険な日もあるため、あらかじめ薪と食料を用意するという。

現在のロヴィアナ集落はすべて海岸部にあるが、ラグーン内にある「小島」 *nunusa* に集落を作る場合は、*peza* の影響をよけて「西向きにはしない」（D、30代男性、ムンダ、2023/9/17聞き取り）が、「本島」 *tutupeka* や「堡礁島」 *toba* につくられる規模の大きな集落については、考古学的にみて *gevasa* を避けた作りになっている（Nagaoka 2011：278）。風が社会に大きな影響をもたらしていたことが分かる。



図4. 北西モンスーン *peza* によって倒れた樹木（2023年3月筆者撮影）

以上の貿易風と季節風に加えて、季節性が明瞭ではない風に *toga rauru* がある。北北西の風 (*rauru* は北北西に位置するチョイスル島のことも指す) で「好天・風」*bule* をもたらす (R、60代男性、オリヴェ、2014/11/4)。ロヴィアナはニュージョージア島南岸にあるため、海 (南) から来る風が雨をもたらすのに対して、島 (北) から来る風は乾燥していることが多いためと考えられる。そのほか、Aswani & Vaccaro (2008) は北東風である *zokolo*、南西風である *givusu hopo* という語彙も記録している。なお住民は20世紀後半からは、それ以前と風の傾向が変わったと人々は認識している (Aswani & Vaccaro 2008)。

人々は季節ごとの波浪も意識している。波が立っている、海が荒れている様子を *ragi* という。多くの場合、強風の時にうねりが大きくなるが、陸地ではそれほど風が強くなくとも、沖合の海が荒れていることもある。そして *peza* の時だけでなく、*gevasa* の期間であっても荒れることがあり、6～7月頃は「海が荒れる時期」*totoso ragi* と言われ、沖にでるには特に注意が必要とされている。一方、天気が良いことは *bule* というが、これは雨が降らないこと、風が弱いこと、波が穏やかなことの、どれにも使う。

4.5. 生物の季節

ロヴィアナの主要な農作物はサツマイモとキャッサバであるが、いずれも外来作物であり、同地の気候において栽培や収穫に季節性がない。一方、在来作物で主なものはタロイモ (*Colocasia esculenta*、ロヴィアナ名 *talo*) をはじめとするタロイモ類、ダイジョ (*Dioscorea alata*、同 *marihi*) やトゲドコロ (*D. esculenta*、同 *dikidiki*) をはじめとするヤマイモ類であった。これらの在来作物についても、東隣の言語集団マロヴォにおいてダイジョのみは7～9月頃に植えられ、3～5月頃に収穫されるというが (Hviding 2005)、現在の季節性はあまり明瞭ではない (伊藤 1967: 75)。オセアニアには、ヤマイモの季節性が暦や儀礼と深く関わっている地域もあるが、ロヴィアナにそれは当てはまらない (Malinowski 1922; Balick & Collaborator 2009 など)。

文化的に重要な子実植物カナリウムには、結実の季節がある (古澤 2022; Hviding & Bayliss-Smith 2000)。カナリウムには在来種のスロモンカナリウム (*Canarium salomonense*、ロヴィアナ名 *tovinia*) と、それより実が大きく有史以前に他のメラネシアからもたらされたと思われるカナリアノキ (*C. indicum*、同 *okete*) がある (Hancock & Henderson 1988)。ロヴィアナ語の *okete* は、「カナリアノキ」1種をさす場合だけでなく、「カナリウム」2種を総称する語彙でもあり、さらに広義には「ナッツ (子実) 類」を総称するためにも用いられる。本論文では、特に必要ない限り2種を区別せずにカナリウムと表記するが、Waterhouse (1949) 等における記録の *okete* も同様である。

カナリウムは、生産性が高く、管理が比較的容易であり、食用以外に燃料やカヌー材にもなるうえ、祖先が植えてきたため口頭伝承や土地所有権を裏付ける根拠になることもあり重要で

ある（古澤 2021）。地域によっては暦に組み込まれていることも報告されている（Thomson and Evans 2006）。結実時期はソロモンカナリウムのほうがやや早く7月から1～2か月であり、カナリアノキは8月からである（Thomson and Evans 2006）。カナリウムは燻製にすることで、長期保存が可能であり、それは大変美味しいものである（図5）。カナリウムを集めることをロヴィアナ語で *hero* という。収穫したものをタロイモと一緒に臼で、ココナツミルクを加えながら特別なご馳走を作った（R、60代男性、オリヴェ、2014/11/5）。また、カナリウムを在来野菜であるスリッパリーキャベツ（*Hibiscus manihot*、ロヴィアナ名 *neka*）の葉とともに層状に重ね、ココナツミルクとともに「石蒸し焼き」*motu* した料理は *mamahi* と呼ばれ、チーフ *banara* の食べ物であったという（同）。たとえば、聖地の種類として *hope majini* は農作物の収穫に関わるものとされ、そこに捧げる特に重要なものはカナリウムであった（海産物の聖地は *hope inaru*）。



図5. 保存されているカナリウム *okete* の実（2014年11月筆者撮影）

ロヴィアナ語で *garumu* と呼ばれるのはオカガニであり、ミナミオカガニ（*Cardisoma carnifex*）とオカガニ（*C. hirtipes*）である。オカガニ科の種は、ある季節の満月の夜に、それまでやや内陸に穴を掘って住んでいるのが、メスが抱卵して一斉に海岸へと向かう生態で知られ、オーストロネシア語族で暦に用いられることがある生物である（秋道 1995:55-56）。オーストラリア領クリスマス島ではおびただしい数のオカガニ科のアカガニが道路を埋め尽くし、自動車に轢かれないようカニの通り道が作られるほどであるが（藤田・成瀬 2011）、ソロモン諸島各地のオカガニも同様の生態をもち、季節的に人々に採取・利用されてきた（Foale 1999；武田ら 2000；Hviding 2005）。

ロヴィアナにおいては、オカガニの大発生は12月前後に起こる。夜になると懐中電灯をもった人々が集まり積極的に採取・利用する。12月の満月は「オカガニの時期」*totoso te garumu*と例えられる（B、60代男性、オリヴェ、2014/11/3聞き取り）。ただし、ロヴィアナの中でも、地域の植生等によってオカガニの個体数は異なる。

海生生物の季節は、他にもあり、アオウミガメ（*Chelonia mydas*）の繁殖期や、ハタ科やオニカマスなど魚種ごとの時期が認識されている（Aswani & Vaccaro 2008）。

一方、オーストロネシア語族でしばしば用いられるものに多毛類の生殖群泳があるが、ロヴィアナの語彙はほとんど認識されておらず、季節性も知られていない¹⁰。

4.6. 星の知識

星はロヴィアナ語で *pinopino* と言い、この語彙は惑星や恒星だけでなく、星団、そして星座についても使われる。さらに、天の川を「煙の星」（*pinopino tunaha*）と呼んだ人もいる（E、60代男性、ムンダ、2014/11/1聞き取り）。ただし、流れ星は *mateana*、隕石は *palo* などと呼ばれる（R、オリヴェ、60代、2014/11/4聞き取り；ムンダ、40代男性、2014/11/2聞き取り）。ここで *mateana* は、霊的な力を持つものとされ、ロヴィアナの共通祖先たち（あるものは天に上り、あるものは地に潜った）のことを指し、さらにロヴィアナ語版聖書が作られたときに「天使」*angel* の意味に当てられた。流れ星に精霊がいるという理解はニュージョージア島に広くみられる（Somerville 1897：383）。

現在のロヴィアナで、比較的によく知られている星の一つは金星である。ロヴィアナ語で明けの明星は *habia*、宵の明星は *govete pisi*、*matagutu barojo* などいくつかの呼び名がある。後者の *govete pisi* は「逃げる、刺す／噛む」、*matagutu barojo* は「怖がる、いびき」と直訳できる。ここで *matagutu barojo* の名を挙げたインフォーマントによると、居眠り（いびき）が見つかって恥ずかしくて怖がる様子をいうのであるという（B、70代男性、オリヴェ、2014/11/4聞き取り）。なお、単に「いびき星」*pinopino barojo* と呼ばれているのは、恒星のまたたき（シンチレーション）が、いびきに例えられるものである。

宵の明星が「逃げる」「怖がる」とされるのは、夕方現れて夜間には消えるためであるされるが、人々はこの動きを、夜間に時間を知るのにつかう。特に夜間、漁をするときに時間のしるしとする一つである。一方、明けの明星は、もうすぐ日が昇ることの兆しであり、やはり時刻を知るのに用いられる（S、40代男性、ムンダ、2014/11/2聞き取り）。

また、軟骨魚類の「エイ」*tape* に例えられる星座がある。エイの尾のように一つだけ飛び出した星があり、その向きをみて時期や夜の時間経過を知るという（E、60代男性、ムンダ、2014/11/1聞き取り；S、40代男性、ムンダ、2014/11/2聞き取り）。「エイ座」とでも呼ぶべきこの天体は、人によって指すものが違う可能性があり、南十字星のことを指した人や、筆者が直接

確認できなかったが、さそり座を想起させた人がいた。日中は太陽の高さにおうじた時間分類がされるのに対して、夜間は金星やエイ座という天体によって時間を分けているようである。

しかしやや意外なことに、ロヴィアナで聞き取りをする中で、星を通した季節周期、つまり公転周期によって変わる星について、暦との明確な情報は得られなかった。ある老人は、かつて自身の親が、数カ月かけて西から東に移動する4つの恒星を漁期の把握に使っていたが、名前を聞かなかつたし、いまではどの星のことかもわからないと述べた (R、60代男性、オリヴェ、2014/11/3聞き取り)。

他のオーストロネシア語族集団で暦に用いられる天体について (Igarashi 1997; Goto 2022 など)、筆者は情報を集めようとした。まずオリオン座の三ツ星は、ロヴィアナでもよく知られている。この星は *valusa* もしくは *mola valusa* と呼ばれ、「カヌー」*mola* で弓角型の疑似餌をトローリングのようにして行う「伝統的なカツオ漁」*valusa* をしている三兄弟に例えられる。この位置に応じて、その時期に回遊する魚種を知ることができるという。しかし、この星の季節や暦との関係を説明できる人はいなかった。

オーストロネシア語族集団で恒星周期=太陽周期の把握に用いられる他の天体にプレアデス星団 (M45、すばる) とアンタレス (さそり座 α 星 A) がある。Waterhouse (1949) にはプレアデス星団として *bibolo* という名が充てられており、アンタレスについては記載がない。そこで、筆者のほうから *bibolo* という天体について知っているかどうかを聞いていったが、次の2例を除いて、知る人はいなかった。例の一つは、筆者がそのインフォーマントとともに夜空のプレアデス星団をさしたところ、彼はかつて漁の時に目印にするためよく見ていたが、名前は知らないと答えたが、その後雑談をしていたところ、幼少期に大人が *bibolo* と呼んでいたことを思い出したといった (B、70代男性、オリヴェ、2014/11/3聞き取り)。例の二つ目は日中の聞き取りであり、筆者がプレアデス星団の説明を口頭でも、インフォーマントは「そのような名前を知らない」と答えていたが、その後に *bibolo* の名前を出すと、かつて大人たちが確かにそのような星をその名前で呼んでいた、と思い出した (M、70代男性、オリヴェ、2014/11/4聞き取り)。これらの例外は、筆者が誘導した可能性を排除できないものの、*bibolo* がプレアデス星団を指すことを否定するものでもない。

一方、別のインフォーマントは、サンドフライ (サシチョウバエ亜科の種) *nikuniku* の星があったといい、それは小さな星が集まる様子をサンドフライが群れて血を吸っている様子とみなしたのであり、近くに「血」*ehara* を表す赤い星があるということを語った (E、60代男性、ムンダ、2014/11/1聞き取り)。その星を直接視認することはできなかったが、星の集まりが星団、赤い星がアルデバラン (おうし座 α) だと考えると、これもプレアデスを指す可能性がある。

ここで *bibolo* には別義があり、それは首狩り風習のあった時代、戦士達が村に上陸する前に、別の場所で行う儀礼的性交渉、またはそのために集まった女性たちのことであり、今でもこの

語彙は売春行為の意味で用いられることがある (Waterhouse 1949 ; Nagaoka 2011 など)。ただし、*bibolo* は戦闘用カヌートモコの舳先に派手な装飾を施す意味にも使われる (図6)。後者の場合は、重複形で *bibibolo* とも言われる。プレアデス星団が複数の女性または男女が集まる様子を例えたか、たくさんの装飾がある様子を例えた可能性がある。

Someville (1897:404) は 19 世紀末に、ニュージョージア島でオリオン座、ケンタウルス座、金星、プレアデス星団、そのほか1つか2つの星の名前を一人の住人から聞いたが、公表する前に記録を紛失してしまったという。その名前が残されていないのは残念であるが、当時から知られていた星の数は、今回筆者が収集できたものと、さほど変わらないようである。



図6. 装飾を施された戦闘用カヌー *tomoko* (復元) と製作者 (2003年11月筆者撮影)

4.7. 暦月名

これまで、ロヴィアナでみられる主な時間と季節の認識を分析してきた。最後に、Waterhouse (1949) に記録された月名を分析する。月名を表す語彙とその説明について、同文献内で1項目内に複数の月名がある場合は分け、また複数単語の解説から1項目の説明が成立する場合は一体化するよう、一部改変して引用する (表2)。また、表2における月の順番は、説明の都合によるが、かならずしも時間的前後関係によるものではない。

表 2. Waterhouse (1949) に記載されたロヴィアナの月名 (一部改変して引用). [] 内は記載ページ.

ロヴィアナの月名	説明
<i>Tabuna</i>	The name of an important month - approx. May. <i>tabutabuna</i> . See <i>hai</i> [p. 152].
<i>Vahibi lavata</i>	The name of a month [p. 153]. <i>hibi</i> , as <i>va hibi</i> , to offer new <i>okete</i> and <i>tovinia</i> at a <i>hope</i> at the New Year [p. 148].
<i>Kinamine</i>	The name of a month, approx. July, when confession is made and thank-offerings presented. Those not confessing were supposed to be liable to be bitten by sharks. At <i>kinamine</i> men were allowed to eat of the new crop of <i>okete</i> . <i>kinamine koreona</i> and <i>kinamine maqotana</i> [p. 149].
<i>Haele</i>	The climbing month (i.e. for <i>okete</i>), <i>hinaele</i> ; the season when women may eat <i>okete</i> [p. 148].
<i>Hivaha mateana</i>	The name of a month or period approx. August. <i>Hivaha</i> , a feast day <i>rane hivaha</i> [p. 149].
<i>Lomu kubata</i>	The name of a month. See <i>hivaha mateana</i> [p. 150].
<i>Tomelaŋono</i>	The name of a month. <i>Okete</i> are then packed in <i>huvihuvi</i> , and put away to be smoked. Some are taken to the <i>hope</i> of <i>laŋono</i> . The <i>hidihidi</i> ¹¹ are collected and hidden [p. 152].
<i>Muzara</i>	The name of a month - approx. October. <i>minuzara</i> , the name of a month. Men then commence to eat smoked <i>okete</i> [p. 150].
<i>Susuni</i>	The name of a month; the season for general offering of smoked nuts (<i>okete</i>) at <i>hope</i> [p. 152].
<i>Garumu kara</i>	The name of a month (approx. November) when crabs (<i>garumu</i>) appear in the bush, but have not yet swarmed to the beach [p. 24].
<i>Garumu leana</i>	(Approx. December), when crabs move to beach [p. 24].
<i>Poraja hite</i>	The name of a month, approx. January, when crabs are going off in condition. Some are still good [p. 96].
<i>Poraja lavata</i>	The following month when crabs are no good for food [p. 96].
<i>Mauru</i>	The name of a month, March [p. 150].
<i>Zulesope</i>	The name of a month - approx. March [p. 146].
<i>Roberobe</i>	The name of a month [p. 151].

このように計 15 の語彙がある。表をみてわかる通り、グレゴリオ暦における 1 つの月に 2 つの月名が充てられているのが *Mauru* と *Zulesope* である。逆にグレゴリオ暦における月が未記載な語彙が *Vahibi Lavata*、*Haele*、*Tomelaŋono*、*Lomu Kubata*、*Susuni*、*Roberobe* である。

筆者の現代ロヴィアナ語能力において、月名の意味が明らかなのは *garumu kara* (オカガニに形容詞的に赤いインコの 1 種の方名もしくは数詞の 2 がついている)、*garumu leana* (良い

オカガニ)、*haele* ((木に) 昇る)、*tabuna* (英語ないしピジン語の *taboo* に接尾辞がついている) である。続いて *poraja* はオカガニがあまりいない状況を指しており、取れない程度が「小さい」*hite* か、「大きい」*lavata* かがある。動詞としての *muzara* は「(石や木の実を) 割る、砕く」の意味、*sumi* は「刺す、注射する」の意味であるが、月名としてどういう現象を意味するのか、また同音(類音)で別の意味があるのかは明らかではない。また Waterhouse (1949) を用いて理解できるのは、*vahibi lavata* は、カナリウムを聖地に捧げる動作が偉大な(もしくは単に大きい)状態、*hivaha mateana* は特別な饗宴 *hivaha* に形容詞的に *mateana* (前節参照) がついていることである。それから、*tome lajono* は *lajono* という名の聖地に「隠れる・隠す」*tome* といったところである。また *lomu kubata* は、「熟したカナリウムの実」*kubata* が「落ちる(落果する)」*lomu* を意味する。それから、*mauru* は「体が大きい人」(Waterhouse 1949: 73) の意味があるが、月名としてどういう事象を指すのかは不明である。

そういうことを踏まえると、表で *Garumu Kara* から *Poraja Lavata* にあたる期間は、月名がオカガニの生態とその利用と一致しておりわかりやすい。つまり、11月頃にオカガニがみられるようになり、12月が最盛期となり、1月にはあまり取れなくなり、2月にはまったく食用に適さなくなることを暦にしている。

月名からでは意味が良く分からないが、説明を読むと一連の流れを理解できるのは、*Vahibi Lavata* 以下8つであり、カナリウムに関わる。このうち説明にグレゴリオ暦が書かれているのは3つに過ぎず、それによると7月 *Kinamine* には男性がカナリウムを食べられるようになり、8月 *Hivaha Mateana* に饗宴の時期があり、10月 *Muzara* には男性が燻製にされたカナリウムを食べ始める。ここで、カナリウムの生態と記録された解説から、グレゴリオ暦における位置づけが不明な他の月を類推することができる。*Vahibi Lavata* の説明にある「新年に新しいカナリアノキとソロモンカナリウムを聖地に捧げる」行為は、カナリウムが実り始めると人間が利用するより前に行われる行為と考えられる (Hocart 1922 も参照)。さらに後述するように、表中で5月頃とされる *Tabuna* が「新年」の始まりであるので、*Vahibi Lavata* はそれより後、*Kinamine* より前で6月頃である。

女性がカナリウムを食べ始める季節がどこに位置づけられるかはそれだけではわからないが、木に登って取るということはカナリウムが熟したが落果はする前であろうから、*Haele* は前段落で挙げた *Kinamine* の月より後になる。そうすると *Hivaha Mateana* と時期が重なるが、この月名は、カナリウムの熟した実が落ちることを意味する *Lomu Kubata* に参照されていることは、ロヴィアナおよびニュージョージア島近辺の習慣において、饗宴でカナリウムの実が欠かせないことと一致する (Hviding & Bayliss-Smith 2000; Hocart 1922 など)。続いて、木に登ってカナリウムを採る時期が先、熟して落ちたカナリウムを収穫する時期が後と考えると、*Haele* の月の後に、これら2つの月があって、いずれも8月～9月頃にあったと類推できる。

先述のように10月に燻製カナリウムを男性が食べ始めることからすれば、カナリウムを包んで燻製にする *Tome Layono* は、それより前の9月頃になる。また *Susuni* が燻製カナリウムを聖地にて皆に提供するの意味であるとすれば、これも *Muzura* より前であるはずで10月頃に位置付けられる。

筆者の聞き取りにおいて、これらの月名を知る人と出会うことはなかった。しかし、かつてはカナリウムの果実が重要であり、聖地に捧げられていたことが伝えられているのは前節の通りである（図7）。



図7. チーフと戦士達のためのカナリウムとタロイモによる料理を作る時に用いられた、ワニ型の巨大な白 *hao*（2001年9月筆者撮影）

このようにカナリウムを巡る儀礼月は、グレゴリオ暦における月数より明らかに多いが、オカガニの月々はおおむね同じ月数になる。これは、オカガニの繁殖生態は、満月ごとに出現するという朔望周期と一致しているのに対し、カナリウムはそうではないうえに人間が執り行う儀礼と結びついているためであろう。

オカガニより後の3月頃とされる *Mauru* と *Zulesope*、および月名であることしか記載されていない *Roberobe* については、文献においても、筆者の聞き取りにおいてもそれ以上の情報を得られていない。

最期に「重要な月」とされる *Tabuna* である。説明にある、*hai* は *hae* ともつづられる語彙であり、Waterhouse (1949) は *hae* の項目に病気を追い払うことに関連した儀式であるという説明とともに、この音を叫ぶことがロヴィアナの人の「New Year」と記載しているように、この月はロヴィアナにおけるかつての新年の始まりであった。

ここで *tabu* (-*na*) という語彙について検討を加える。Waterhouse (1949: 118) は *tabu* の項目に「To put a taboo (under certain circumstances) on food. *tabunia*. Perhaps an introduced term」として、これはロヴィアナ語彙ではない *taboo* に由来する可能性を示唆している。日本語でも使われる単語「タブー」*taboo* は、語源となったポリネシア諸語のアルファベット表記では *tabu* である。ロヴィアナ語には第2節に書いたとおり、*hope* という単語があり、これは聖地だけでなくタブー全般に用いられ、現代ピジン英語における *tabu* (*tambu*) と置き換え可能である。

続いて他の文献からも、*tabu* がロヴィアナ語において借用語であるのかを、検討しておく。Waterhouse (1949) は、性的なロヴィアナ語彙の説明などにおいて、英単語として *tabu* の綴りを用いている場合もある。ロヴィアナにおけるこの単語使用で、最も古い記録と考えられるのは、博物学者・行政官のチャールズ・M・ウッドフォードが1885年調査の記録において、*taboo* とイタリック体の *tambu* (現在のロヴィアナ語表記の *tabu*) を併記している (Woodford 1889)。続いて、海軍士官にして多くの工芸品を収集したボイル・サマーヴィルは、ロヴィアナ語彙 *hope* の意味を、英単語 *taboo* で補足している (Somerville 1897: 372)。一方、ロヴィアナを訪れた最初の宣教師であるゴルディは1908年の講演で、共有財産を私物化しようとしたロヴィアナ人がその財産に *tambu* (*tabu*) をかけて、他人の精霊的な恐怖心を引き出したことを述べている (Goldie 1909)。なお、*hope* = *taboo* となるのは、マロヴォ語等西部ソロモン諸島のオーストロネシア語族でいくつかみられる。

しかしシンボ島でピジン英語を用いて詳細な研究を行った Hocart (1922) は、その日常や儀礼におけるタブーを、シンボ人が説明した単語または文の記録としてすべて *tabu* (*tambu*) を用いている。ただし、シンボ島はニュージョージア島より船が停泊しやすかったことから、ロヴィアナよりもヨーロッパ人との接触が密であったことや、ホカートがピジン英語で調査を

行ったことに注意が必要である。

これらの記述は、ヨーロッパ人がポリネシアで出会い英語化した *taboo* という語彙によって、この地域の記録を行ったことや、それを通じて *taboo* の概念がローカル化 (*tabu*) した蓋然性を示すが、ヨーロッパ人以前からこの語彙があった可能性を完全に否定するものでもない。

本節では様々な月の名前を挙げたが、筆者の聞き取りにおいては、*Tabuna* の月名を知っている人はいたが、それ以外の月名を知っている人はおらず、「*Tabuna* 以外に月に名前はなかった」(B, 70代男性、オリヴェ、2014/11/4 聞き取り) と答えた人もいた。また、この月名を知っている人は、それが *hai* と結びついていることも知っていた (E, 60代男性、ムンダ、2023/2/19 聞き取り、他)。

4.8. 新年儀礼 *hai*

ここで新年儀礼とされる *hai* は、現代にはほとんど受け継がれておらず、筆者が参加したことはなく、文献においても詳細な記録は確認されなかった。しかし、聞き取りよれば、以下のようになる。

まずサメや魚類、ヘビなどの動物を採ってきて殺して、村中におちまける。村はその腐臭に満たされて、人間にとっては苦しいほどである。この行為の意味は、病をもたらず霊としての *tomate* が、その匂いを嗅いで、その村の人間は死に絶えたと思い、他の地域へと移動するということである。つまり、この行為の意味するところは「疫病」*oza*¹² を退散させることであった (B, 70代男性、オリヴェ、2014/11/4 聞き取り)。ただし、疫病だけでなく、首狩り風習など「良くない」*lopu leana* ことを1年間積み重ねたところに、*hai* を通してその積み重ねを追い払い、「良い」*leana* 年に入るためでもあったという (同)。なお Waterhouse (1949) には「*Tabuna* の時に追い払うもの *sapu hae pania pa Tabuna*」として *bubusolo* という単語が記載されており、意味として病気 (*sickness, diseases*) が充てられているが、現在のロヴィアナ語では「大災害」といった意味に用いられる。

また *hai* は、5～6月のある新月の明け方にロヴィアナ東端の村で突如として始まる。腐臭に満ちた村で、人々が大声で「*hai!*」と叫ぶ。その叫び声が周囲に響き渡ると、それを聞いた西隣の村で、人々が「*hai!*」と叫ぶ。それが、順番に西へと伝わり、西端の村まで着いたら終わる。当時幼かったインフォーマントは、大声が東から徐々に伝わってくるのは、「実に恐ろしかった」*vari va matagutu* という (B, 70代男性、オリヴェ、2014/11/4 聞き取り)。

このように *hai* が東から西に伝わったことは間違いはないが、全ロヴィアナではなく、ヌサロヴィアナ島からムンダにかけてだけ行われたという意見もあった (P, 70代男性、ヌサロヴィアナ、2023/9/18 聞き取り；L, 60代男性、ムンダ、2023/9/17 聞き取り)。ムンダでは近年まで行われていたとか、今でもやめた訳ではないという意見もあったが、最近行われたことの記

録や明確な記憶は見つからなかった。

ちなみに *hai* の重複語 *haihai* は、季節に関係なく、日常的に使われる語彙であり、食べ物にたかるハエや虫を追い払う、払い除ける動作を指す。

人々の見解は、広く見たとしても5-6月頃であったという意見で一致しており、Waterhouse (1949) の解説と同様である。これは年明け後にカナリウムの儀礼が行われ、生態学的な条件として7月頃にはカナリウムが結実し始めることとも一致する。それでは、この5月頃に、どのように人々は太陽周期を把握して「新年」を始めていたのであろうか。この疑問について答えられる人を見つけることはできなかった。

5. 総合考察

本論文は、ロヴィアナの季節認識を、潮汐、風、天体、生物現象、月名語彙を通して分析した。明らかになったこと、および明らかにならなかったことは、以下のようにまとめられる。

1. 月名と生物周期の分析から、オカガニに関連する4つの月名（おおむね11月～2月）はその採集が毎満月ごとであることからして、この季節に暦月の進行が朔望周期と一致すると考えられる。またオカガニの繁殖行動は太陽周期における季節性も強いいため、この季節は太陰太陽暦的である。
2. また新年儀礼 *hai* が「新月」に行われていたことから、*Tabuna* も朔望周期との同期がある。そしてこの暦月は、グレゴリオ暦の5～6月頃であったとすれば、この時期も太陰太陽暦的であると推定される。しかし時期を特定する技法についての信頼できる十分な記録がなく、インターカレーションは不明である。
3. 月名語彙や各月に行われる行事には、カナリウムにまつわる儀礼を指すものがいくつもあった。これらはカナリウムの生態からして7月～10月であり、植物の結実時期等は毎年変動するが、ゆるやかに太陽周期と一致していた自然暦と推定される。その一方、朔望の数を超える月名が記録されていることから、儀礼にまつわるこの季節の月名は朔望周期とは異なるものであった可能性がある。
4. 公転によって起こされる潮汐と風の季節は広く認識されている。かつての暦を想像すると、潮汐が変わってきたことをみて季節を把握する、風が吹くのをみて季節を把握する、というように、自然現象を見て事後的にその季節を知るという自然暦的な用いられ方をした可能性が一つである。もう一つの可能性としては、上述のオカガニ出現が起こることで「日中深い」潮汐季節になるとか、季節風の季節になることを予測できた可能性もあるが、情報や記録はない。潮汐に限れば、徐々に潮位が変わってくることを日々観察することによる予測も理論上は可能であるが、「日中浅い」から「日中深い」への転換期の語彙がない

ことから、そのような観察はされていなかったのではないかと考えられる。

5. オリオンの三ツ星とプレアデス星団については、少なくとも一部の住民が識別していることは分かったが、星を用いた暦は現在確認されなかった。しかし、星が夜間の計時に使われるほか、言語化されていなくとも星が漁季などの季節認識に含まれる様子はみられ、また親世代は知識があったという意見も聞かれたことから、かつて星暦もあった可能性は否定できない。
6. これらのことからすると、ロヴィアナの暦は、自然（潮汐、風、生物）の変遷によって、通年でゆるやかに太陽周期と一致しており、少なくともオカガニの季節と「新年 *Tabuna*」が太陰太陽暦で成り立ったことが分かる。季節によって暦法が変わるのか、異なる暦法が平行しているのかは議論の余地がある。
7. ロヴィアナ地域は降水量の年内変動が少なく、通年で作物が得られ、季節に応じて何らかの魚介類資源もあることもあり、暦によって季節変化を厳密に予知することが生業・生存に必須であるとはいえない。本研究では、暦の仕組みで解明できなかった点は残るが、記録されている儀礼や自然資源採取のためであれば、今回得られた情報で理解できる。

こういったことを踏まえて、西ソロモン諸島で詳細な暦研究があるシンボ島との比較を行う。シンボ語はロヴィアナ語と同じ系統であり、語彙や文法に共通点が多い。シンボ島の暦研究は、人類学者 Hocart (1922) が葬送儀礼と信仰を調べる中で残したいくつかの月名と儀礼、Burman (1981) が現地で外国人として初めて見つけたという紙に書かれた暦月の一覧、および両者が記録した潮汐、風、その他の自然現象と生業の季節性からなる。

Burman (1981) は、シンボ島で暦を管理する唯一の人物のところで、シンボ語で *pepapopu* という秘蔵されていた紙によって、フォーマルな暦としての10月名（すべての月名）の一覧と順序を見つけたという。このシンボ暦の月名とロヴィアナ暦の月名に、共通点は意外と少ない。まず10個のうち9個は、ロヴィアナ語の月名にない語彙である。月名やその説明において、オカガニは登場しないし、カナリウムが出てくるのは、*Irumanjo* と呼ばれる月だけである。月の説明のほぼすべては風に関するものであり、西・北西モンスーン（シンボ語の *penja*、ロヴィアナ語 *peza*）が10月～2月を決め、強風（シンボ語の *raghi*、ロヴィアナ語では波浪を表す *ragi* と同じ発音になる）が4月～9月を決める。

この2つの風の季節の間であって、ロヴィアナ語月名と唯一同じなのは、グレゴリオ暦3月頃にあたる *Tinabuna* という月名（挿入辞 *in*¹³が入っているが、ロヴィアナ語の *tabuna* と同義）である。この月は、病の月であり、風はまっすぐには吹かないという (Burman 1981)。この *pepapopu* の記録が正しいのであれば、シンボ暦は風の変化によって新年すなわち *tabuna* (*tinabuna*) を決めていたように見える。ただし、シンボとロヴィアナは同海域に属するため、季節風の時期は同じであるはずなのに、シンボ島において風向きが変わる季節、そして

Tabuna の月が、2カ月ほどもずれている理由は不明である。

他方、Burman (1981) は、シンボの人々はこの *pepapopu* を知らずとも、季節風 *penja* の季節と *raghi* の季節に対応して、前者をソロモンカナリウムの季節、後者をカナリアノキの季節とする認識があることや、主に女性が従事する貝類採集に関連して潮汐の季節（10月～3月頃が「日中深い・夜間浅い」*odu rane-mati boji*、4月～8月頃が「日中浅い・夜間深い」*mati rane-odu boji*、9月頃がどちらもいえない *matitari*）があり、*pepapopu* のように制度化された暦と、そこには含まれない暦が平行して存在することを指摘している。なおここで、潮汐の季節名はロヴィアナ語のそれに似ているが、風と同様に時期には違いがあることの原因は不明である。

ここで Burman (1981) は、Hocart (1922) の記録を参照したとしつつも、後者の記述とは一致しない部分がある。後者には、カナリウムをめぐる儀礼の詳しい記録がある。その中には、シンボ島では *titikele* という新年儀礼をおこなってから、10日後に *vahimbi*（ロヴィアナ語表記 *vahibi*）の祭りをするということがある（Hocart 1922: 298）。最初のカナリウムつまりソロモンカナリウムは精霊（spirits）に捧げなければならない、その精霊は *ave* と呼ばれる病気を起こすものであり、捧げる儀礼を *vahimbi* という。ここで出てきた *ave* は、赤痢のような疾患を引き起こす精霊であるとされ、一部の祭司はそれに向かって叫ぶことで、この疾患をよけることができた（Hocart 1922: 267）。シンボ語では子音 *h* を用いないことから、この儀礼は外来ではないかと推察されている（Hocart 1922: 299）。この儀礼はまた、新年（New Year）あるいは新収穫（New Crop）を意味する *aoro garamba* とも呼ばれ、そして1908年7月16日に行われたという（Hocart 1922: 299）。

Hocart (1922) によると、シンボでも、ロヴィアナと同じく、カナリアノキの収穫はソロモンカナリウムより遅い8月である。人々はカナリアノキを燻製にして、彼の記録では1908年11月20日に燻製カナリウムを精霊に捧げてから、ようやく食べたという（Hocart 1922: 302-303）。この一連の記述は、ロヴィアナにおけるカナリウム儀礼の記述と似ており、ロヴィアナの月名と同じ *vahibi* という語彙も登場する（ロヴィアナ語には子音 *h* がある）。シンボの「新年」の記録が7月半ばというのは、ロヴィアナ地域の *hai* (*tabuna*) の季節とも、Burman (1981) の *pepapopu* における *tinabuna* とも一致しないが、Hocart (1922) は滞在中の日付を細かく記録していることから、この年にあった日付は正確であると考えられる。

Hocart (1922: 296) はさらに、カナリウム林（先祖から現世代までが栽培してきたカナリウム）をシンボ語で *aoro* と言い、この語彙は「年」を意味するとも書いている。Burman (1981: 257) は、*pepapopu* こそがフォーマルな暦であり、Hocart の記録した暦をインフォーマルなものであるという記載をしているが、*pepa* (paper) はヨーロッパ人がもたらしたものに違いなく、さらに無文字社会だったシンボ島人がいつその紙に記録したのかを考えると、*pepapopu* とい

う資料を批判的にみることも可能である。

シンボ島の暦についての2者の情報を総合しても、ロヴィアナあるいはソロモン諸島西部が太陽や星といった天体によるインターカレーションを持っていた形跡はない。一方、2者の研究を総合すると、風、潮汐、カナリウムといった複数の自然現象を組み合わせて、季節を把握していたことは明らかである。Burman (1981) の記載と、ロヴィアナの暦において、2カ月ほどの誤差はあるものの、*Tabuna* は、季節風から貿易風に変わるころに位置付けられる共通点がある。ロヴィアナ社会やシンボ社会において、政治と信仰に重要な首狩りが、主に季節風の時に行われたこととも関係があるのかもしれない (Nagaoka 2011 : Burman 1981)。

続いて、他の暦法と比較しながら、オーストロネシア語族の暦の中での、ロヴィアナ暦の特徴を考察する。ミクロネシアの暦は、複数の星によって1年を18-19の不等間隔の季節に分けている星暦である (Goodenough 2002)。しかし、これほど細かくインターカレーションを行うのはオーストロネシア語族の中でも多くなく、Yoshida (1980) が調査したインドネシア・ハルマヘラ島のガレラは、プレアデス星団のアクロニカルライジング現象が起こることによって新年とするときにだけインターカレーションを行い、その後は北風の季節である6カ月すなわち「新年」から朔望周期を6回数えるが、南風の季節である残りの6カ月は月名語彙が無い (Yoshida 1980)。

ある現象を観測することによって新年を始める、つまり朔望周期の暦月を太陽周期に一致させるために、その直前の月が延びるあるいは飛ばされる (暦月の数が12-13よりも少ない、ないし多いことがある) 特徴の暦もある (五十嵐 2018 ; 古澤 2017)。これらの例は、太陽暦、星暦いずれであっても、ロヴィアナ暦と同様に1年が朔望周期の数より多く、ないしく少なく分類されうることを示す。

他方、月名の語彙の多さや、同一時期をさす複数の月名の存在は、Waterhouse (1949) が month として記録した *sidara* が、ロヴィアナの人々にとっての「暦月」ではなく「季節」「旬」といった意味であった可能性もある。「月」を意味する単語が、ゆるやかな季節を表すに過ぎない例も、一部のオーストロネシア語族集団にみられる特徴である (例えばインドネシア・フローレス島) (杉島 1990)。

一方、オーストロネシア語族の自然暦で特徴的なものに、海棲生物の生態を用いるものがある。多毛類 (パロロ *Palola viridis* など) 生殖群泳は、サモア (A Member of the Samoan Society 1928)、ロンボク島やスンバ島 (インドネシア) (五十嵐 2018 ; 古澤 2017)、トロブリアンド諸島 (パプアニューギニア) (Leach 1950) などの暦にある。また、ロヴィアナと同様にオカガニが暦に含まれることは、ミクロネシアからニューギニア北部で知られている (秋道 1995)。台湾蘭嶼では毎年決まった時期にトビウオが取り切れないほどに回遊することが、在来暦法で重要な役割を果たしている (Leach 1950)。農耕作物には人為的影響があるため人間

が太陽周期を知るのに適さないが、海棲の野生生物や星は人為的な影響なしに太陽周期とおおむね同期しているため、インターカレーションになると考えられている (Leach 1950)。

カナリウムについても、特にソロモンカナリウムは、野生種からの品種改良がさほどされていないため、人為的影響が少ない生物種である。ニューギニア島の北にあるウォゲオ島は、オーストロネシア語族社会であり、主なインターカレーションはプレアデスによるとされるが、並行してカナリウムの季節も暦に役割を果たすことが知られている (Hogbin 1938)。先に上げたミクロネシアでは、星暦を使うが、それらはパンノキ (*Artocarpus altilis*) の生態と利用に密接にかかわっている (Goodenough 2002)。このように結実時期に改良がされていない果樹作物も、自然暦として用いられている。

恒常風と貿易風の対比により季節を分ける暦も多くあり、星などでインターカレーションをしつつ、1年を風によって2分する社会がインドネシア、メラネシア、ミクロネシアにある (秋道 1995 ; Yoshida 1980 ; Hogbin 1938 など)。潮汐は様々な魚類の産卵行動・回遊行動と一致することから、漁撈社会の暦をなしてきた (秋道 1995)。

ところで、Yoshida (1980) に加えて、Igarashi (1997) がインドネシア広域について調べたところでは、年初を決める天体現象はアンタレスのヒライアカルライジングとアクロニカルライジング、オリオン座の三ツ星のヒライアカルライジング、プレアデス星団のヒライアカルライジングとアクロニカルライジングである。これらの天体現象は他のオーストロネシア語族社会でも利用が多い (Kirch & Green 2001)。そしてオリオン座とプレアデス星団は3月末～6月初頃に現象が連続し、これはロヴィアナの *tabuna* と同じころである。ロヴィアナにおいて人々がこれらの星座・星団を認識していたことからして、これらの天体現象のどれかがインターカレーションに用いられた可能性について、今後さらなる研究が待たれる。

オーストロネシア語族社会の一部にみられる別の特徴は、近隣地域で言語や文化の違いを超えて同期することであり、ある地域で特定の月を迎えたら、翌月に隣接地域で同名の月を迎える例がトロブリアンド諸島 (Malinowski 1922 ; Leach 1951) やインドネシアのスンバ島 (Hoskins 1993 ; 古澤 2017) にある。ロヴィアナの月名において、ロヴィアナ語由来ではないと思われる語彙が含まれることについては、近隣社会と関係がある可能性がある。加えて、ロヴィアナには儀礼 *hai* を通じて疫病をもたらず霊が他の地域に移るという信念があり、そしてシンボでは別の時期に類似の儀礼をしていることは興味深い点である。

以上をまとめると、ロヴィアナの暦には不明の点も残るが、明らかになった点のうち、他のメラネシアやミクロネシアと共通するのは、風により1年を大きく分けること、潮汐により季節を把握すること、生物種の繁殖を暦に取り入れること、栽培樹種の結実とその利用が暦に関係すること、何らかのインターカレーションがあることである。近隣のシンボの暦にオカガニなど海棲生物の要素がないことからすると、西部ソロモン諸島において、ロヴィアナはオース

関わる儀礼が進行した。この間に、潮汐は「日中深い・夜間浅い」になった。その後、オカガニの繁殖生態に合わせて、太陰太陽曆的に進行し、そのころに季節風になった。このような形で、おおむね太陽周期に基づいた生業と儀礼が営まれたが、毎年気象や自然には変動があるため、グレゴリオ暦でみれば1～2カ月ずれた年があったことも推測できる。

新年の始まりをどのようにして決めていたのかは解明できなかったが、図8にあるとおり風の変化、潮汐の変化、およびカナリウムの結実という主要な自然暦との関係の中で絶妙な位置に新年が置かれていることは明らかである。

ロヴィアナの暦は、見かけ上はこれまでに報告されたどの地域の暦とも異なるが、潮汐、風、生物、インターカレーションにおいて地域の地理条件に適したものを用いているだけで、オーストロネシア語族集団に通底する暦のシステムとなっていた。

ロヴィアナが西部ソロモン諸島において有史以前から広範囲に影響を持ち (Aswani & Sheppard 2003)、人類遺伝学的にもソロモン諸島の中心的形質を持つことも考え合わせると (Isshiki et al. 2020)、このような特徴をもつロヴィアナの暦は、オーストロネシア語族の基層文化としての暦を再考するきっかけになる。

付記

ソロモン諸島ロヴィアナのたくさんの方々のご協力に深甚なる謝意を表す。また、この論文を公表する機会を与えてくださった、岡村徹先生（公立小松大学）に心より感謝する。本研究は、人間文化研究機構・グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」、日本学術振興会・科学研究費助成事業基盤研究A「オセアニアの海面上昇と適応策が地域にもたらす影響解明と社会への将来シナリオの提示」（20H00045）、同・挑戦的研究（萌芽）「アジアの伝統暦法は「異常気象」を予知できるか」（19K21663）、同・課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業「地域社会の災害レジリエンス強化に向けて—SNSとクラウドGISを用いた共時空間型地域研究」などによる成果を含む。

引用文献

- A Member of the Samoan Society. (1928) The Samoan Division of Time, *Journal of the Polynesian Society* 37: 228-240.
- 秋道智彌 (1995) 『海洋民族学：海のナチュラルリストたち』東京：東京大学出版会.
- Aswani, S. (1998) Patterns of Marine Harvest Effort in Southwestern New Georgia, Solomon Islands: Resource Management or Optimal Foraging?, *Ocean & Coastal Management* 40:

- 207-235.
- Aswani, S. & I. Vaccaro. (2008) Lagoon Ecology and Social Strategies: Habitat Diversity and Ethnobiology, *Human Ecology* 36: 325-341.
- Aswani, Shankar & Peter Sheppard. (2003) The Archaeology and Ethnohistory of Exchange in Precolonial and Colonial Roviana: Gifts, Commodities, and Inalienable Possessions, *Current Anthropology* 44: S51-S78
- Balick, Michael J. & Collaborators. (2009) *Ethnobotany of Pohnpei: Plants, People, and Island Culture*. Hawai'i: University of Hawaii Press.
- Burman, Rickie. (1981) Time and Socioeconomic Change on Simbo, Solomon Islands, *Man* 16: 251-267.
- Foale, S. (1999) Local Ecological Knowledge and Biology of the Land Crab *Cardisoma hirtipes* (Decapoda: Gecarcinidae) at West Nggela, Solomon Islands, *Pacific Science* 53: 37-49
- 藤田喜久・成瀬貫 (2011) 「クリスマス島カニある記」『Cancer』20, 57-64.
- 古澤拓郎 (2017) 「インドネシア・スンバ島西部の在来暦法：「苦い月」と「ゴカイ月」をめぐる地域間シグナル伝達の分析から」『アジア・アフリカ地域研究』17, 1-38.
- 古澤拓郎 (2021) 『ウェルビーイングを植える島：ソロモン諸島の「生態系ボーナス」』京都大学学術出版会. 295 頁.
- Furusawa, T. (2009) Changing Ethnobotanical Knowledge of the Roviana People, Solomon Islands: Quantitative Approaches of Its Correlation with Modernization, *Human Ecology* 37(2): 147-159.
- Goldie, J. (1909) The People of New Georgia: Their Manners and Customs, and Religious Beliefs, *The Proceedings of the Royal Society of Queensland* 22(1), 23-30.
- Goodenough, Ward H. (2002) Bringing Breadfruit and Fish: Rituals of Sustenance. *Under Heaven's Brow: Pre-Christian Religious Tradition in Chuuk*. Philadelphia: American Philosophical Society, pp. 192-209.
- Gordon, Raymond G. (2005) *Ethnologue: Languages of the world*. Dallas: SIL International Dallas, TX.
- Goto, Akira. (2022) Indigenous Calendar among Oceanic Seafarers. Soma, M, K. Tanikawa, and A. Goto (eds). *Symposium on Calendars Used in Asia and Oceania. Research Papers of the Anthropological Institute* Vol. 11, pp. 62-72.
- Hancock, IR, & CP Henderson. (1988) *Flora of the Solomon Islands*. Honiara: Ministry of Agriculture and Lands.

- Eberhard, David M., Gary F. Simons, & Charles D. Fennig (eds.). 2024. *Ethnologue: Languages of the World, Twenty-seventh Edition*. Dallas: SIL International. Online Database (<http://www.ethnologue.com>)
- Hocart, A. M. (1922) The Cult of the Dead in Eddystone of the Solomons, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 52: 71-112, 259-305.
- Hogbin, H. Ian. (1938) Tillage and Collection : a New Guinea Economy, *Oceania* 9: 128-151, 237-325.
- Hoskins, Janet. (1993) *The Play of Time: Kodi Perspectives on Calendars, History, and Exchange*. Berkeley: University of California Press.
- Hviding, E. (2005) *Reef and Rainforest: An Environmental Encyclopedia of Marovo Lagoon, Solomon Islands/Kiladi oro vivineidi ria tingitonga pa idere oro pa goana pa Marovo. Knowledges of Nature I*. Paris: UNESCO.
- Hviding, Edvard, & Tim Bayliss-Smith. (2000) *Islands of Rainforest: Agroforestry, Logging and Eco-tourism in Solomon Islands*. Farnham: Ashgate.
- Igarashi, Tadataka. (1997) Sidereal-lunar Time Reckoning in Nusantara: A Brief Comparison. In T. Kato ed., *Studies on the Dynamics of the Frontier World in Insular Southeast Asia*. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, pp. 119-136.
- 五十嵐忠孝 (2018) 「インドネシアにおけるパロロ群泳・天体周期と在来暦法の特徴」『東南アジア研究』 55, 111-138.
- 五十嵐忠孝 (2008) 「バリのこよみ・考：現行太陰太陽暦が辿って来た道」『東南アジア研究』 45(4): 497-538.
- 石森大知 (2001) 「ソロモン諸島の親族組織と資源保有・利用形態：西部州ニュージョージア島の事例を中心に」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』 2, 203-219.
- 石森大知 (2001) 「カスタムとファッション：ソロモン諸島ヴァングヌ島における過去と現在をめぐる認識論的連関」『民族学研究』 66, 222-239.
- Isshiki, Mariko, Izumi Naka, Yusuke Watanabe, Nao Nishida, Ryosuke Kimura, Takuro Furusawa, Kazumi Natsuhara, Taro Yamauchi, Minato Nakazawa, Takafumi Ishida, Ricky Eddie, Ryutaro Ohtsuka & Jun Ohashi. (2020) Admixture and Natural Selection Shaped Genomes of an Austronesian-speaking Population in the Solomon Islands, *Scientific Reports* 10 (1) 10.1038/s41598-020-62866-3
- 伊藤清司 (1967) 「西部ソロモン諸島における民族学的調査の覚え書」伊藤清司・近森正 (編) 『英領ソロモン諸島における考古学的・民族学的調査略報』 浜松：開明堂, pp. 52-114.
- Kirch, Patrick Vinton & Roger C. Green. (2001) *Hawaiki, Ancestral Polynesia: An Essay in*

- Historical Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 気象庁 (2018) 「地点別平年値データ・グラフ:Munda ソロモン諸島」『(世界の天候データツール (ClimatView 月統計値))』オンラインデータベース (<https://www.data.jma.go.jp/cpd/monitor/climatview/frame.php>)
- Leach, Edmund R. (1950) Primitive Calendars, *Oceania* 20(4): 245-262.
- Malinowski, Bronislaw. (1922) *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: Routledge.
- Nagaoka, Takuya. (2011) *Late Prehistoric-Early Historic Houses and Settlement Space on Nusa Roviana, New Georgia Group, Solomon Islands*. Doctoral Dissertation, University of Auckland.
- National Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA). (2024) Suva Harbor, Fiji. NOAA Tide Predictions. Online Database (<https://tidesandcurrents.noaa.gov/noaatidepredictions.html?id=1910000>)
- Sheppard, P., R. Walter, & T. Nagaoka. (2000) The archaeology of head-hunting in Roviana Lagoon, New Georgia, *Journal of the Polynesian Society* 109: 9-37
- Somerville, Boyle T. (1897) Ethnographical Notes in New Georgia, Solomon Islands, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 226: 357-412.
- 杉島敬志 (1990) 「リオ族における農耕儀礼の記述と解釈」『国立民族学博物館研究報告』15(3): 573-846.
- 武田淳・川端真人・松尾敏明 (2000) 「ソロモン諸島ガダルカナル島タラウラ村における有用動植物資源と伝統的な利用技術」『佐賀大学農学部彙報』85, 19-43.
- Thomson, L.A.J. and B. Evans. (2006) *Canarium indicum* var *indicum* and *C. harveyi* (Canarium Nut), ver. 2.1. In C.R. Elevitch (ed.) *Species Profiles for Pacific Island Agroforestry*. Honolulu, Permanent Agriculture Resources (PAR).
- United Nations Office for Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA). (2018) Solomon Islands - Subnational Administrative Boundaries. *Humanitarian Data Exchange*. Online Database (<https://data.humdata.org/dataset/cod-ab-slb?>)
- Waterhouse, John H.L. (1928) *A Roviana and English dictionary, with English-Roviana Index and List of Natural History Objects*. Guadalcanar: Melanesian Mission Press.
- Waterhouse, J.H.L. (1949) *A Roviana and English dictionary, with English-Roviana Index, List of Natural History Objects and Appendix of Old Customs* (revised and enlarged by L.M. Jones). Sydney: Epworth Printing and Publishing House.
- Woodford, C.M. (1889) Life in the Solomon Islands, *Popular Science Monthly* 30: 476-487.
- Yoshida, Shuji. (1980) Time Reckoning, *Senri Ethnological Studies* 7: 89-107.

注

- 1 21世紀に入ってから、5言語がパプア諸語からオーストロネシア語族に分類変更された (Gordon 2005; Eberhard et al. 2024)。
- 2 なお、悪いことを起こす、怪物のようなものを *malivi* というが、昔話や動物おとぎ話のようなものを「*malivi* の話」ともいう。
- 3 東アジアにおいては、朔望で月を数えつつ、閏日や閏月を挿入することで、太陰太陽暦を成立させていたことから置閏法という語が使われるが、オーストロネシア語族の場合には朔望で月を数えずに太陽周期と暦を同期させている場合もあることから、本論文ではカタカナ表記のインターカレーションを用いる。
- 4 例えば上述の町ムンダのことは、ソロモン諸島政府の地図では Munda と表記されるが、ロヴィアナ語では Muda とされる。
- 5 時間接続詞は日常会話では *totoso* も用いられるが、丁寧な表現では *sipu* である。
- 6 ロヴィアナ語の多くの名刺は人称によって接尾辞が変わる。基本的な接尾辞は1人称単数 *-qu*、2人称単数 *-mu*、3人称単数 *-na*、1人称複数（2人称を含む）*-da*、1人称複数（2人称を含まない）*-mi*、2人称複数 *-mia* (*mu*)、3人称複数 *-di* となる。
- 7 女性の月経のことを *dogoro sidara* というが直訳すれば「見る、月」となる。
- 8 インフォーマント (B、70代男性、オリヴェ 2014/11/4-5 聞き取り) は、宣教師ゴルディの身の回りの世話をしたなど、幼少期からキリスト教教育を受けた。サイキレ慣習地には、ゴルディが伴ってきたトンガ人の宣教師が長く滞在した。その宣教師は、1年は12カ月、1週間は7日間に沿ってロヴィアナ人に礼拝と労働を習慣づけようとした。すると当時の老人の一人が、それでは時間が足りないから「1週間を10日にして欲しい」と言ったので、宣教師は困ってしまって、「7日に決まっているからそれに従いなさい」と答えた、という。
- 9 *Vekoa* は英語で *place, put down* の意 (Waterhouse 1949)
- 10 頻繁に漁をするごく一部の人 (S、40代男性、ムンダ、2014/11/2 聞き取り) は、多毛類の大発生を見たことがあると言ったが、その名前や時期は知らなかった。また高齢のインフォーマントによると、20世紀初頭、サイキレ慣習地に最初に訪れた宣教師はトンガ人であり、宣教師が祖国の風習により多毛類を食しているのを見たが、ロヴィアナの人たちはそれを奇妙なものとしか考えず、自分たちは食べなかったという (B、70代男性、オリヴェ、2014/11/4 聞き取り)。これらのことは、ロヴィアナでは多毛類が重要ではないことを示す。
- 11 筆者は *hibibi* の誤記ではないかと考えている。

- 12 *Oza* は、特定の病気を指すのではなく、疫病を総称する語彙である。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）も *oza* の一つである。
- 13 語頭が子音の場合 *in* は挿入辞になるが、語頭が母音の場合は接頭辞になる（例：「聞く」*avoso*、「知らせ、ニュース」*inavoso*）。